●制作

カレイドスケープ
―うつろう風景から浮かぶ“渋谷らしさ”―

酒田　祥佳　園芸学部 緑地環境学科　造園学プログラム（主指導教員：木下剛）
SAKATA Sachika

１．研究の背景と目的

都心の再開発とウォーカブルなまちづくりが、その街の地域性に与える影響に着目した。再開発は都心の主要駅周辺で近年進められており、街並みが整理され便利になる一方でどの街にも高層ビルなどの新しい構図物の増加などにより同じような街並みが広がり、それによってそのまちらしさが薄れているのではないかと考えた。そのため各自治体のまちづくり計画では、再開発による地域性の損失に対してウォーカブルな空間形成にそのまちらしさや地域性を創出していくことが重要である。本研究は、その具体的な方法について検討し提案を行う。

２．対象地分析

現在大規模な再開発が行なわれている渋谷駅周辺を対象とした。渋谷は時代や価値観の変化により、近年訪れる人の層が若者だけではなく多世代に広がっている。その影響を受けて再開発では今までの「若者の街」から「大人も楽しめる街」へ変化を目指している。しかし現状では歩行者の通行量に対して車の通行量も多く安全性が不十分である。

また再開発によって、駅前にできた商業施設を含む高層ビル群の建設は新たな渋谷のシンボルとなりつつも、これまでの渋谷全体の風景から大きく変化している。さらにそれによる再開発が及ばないセンター街周辺エリアのまちを歩く人びとの変化や減少により、渋谷らしさがこれまでとはその変化の速度や特徴が大きく変わり始めている。これらのことから古くからの渋谷らしさを残すセンター街を中心として他のエリアとつながる渋谷駅北西エリアを対象地とする。

３．渋谷らしさ

個々に発達してきた各ストリートのカルチャーが意欲のある若者たちによってイノベーションを起こしどんどん流行を作っていた 70～90 年代、その後コト消費やファストファッション、インターネットなど環境の変化による人びとの価値観の変化により渋谷発の流行も見られなくなり、ストリートを歩く人々は減った。それにより街全体としてターゲットを大人に向けたまちづくりによって、ごちゃごちゃした街並みから綺麗な高層ビル、若者のポップカルチャーから大人向けのビジネス街など、新たな渋谷ができようとしている。

渋谷はこのように時代に合わせてそれまでの渋谷と新たな流れが絡み合い、新たな渋谷として変化し続けてきた。これまでとこれからの混ざり合いにより新しいものが生まれ常に変わり続けることを渋谷らしさと定義して提案を行う。

４．提案

渋谷が大きな変革を迎える現在、現在の渋谷をしっかりと捉え、それを生かして渋谷らしさがこれからも発展していくことを目指す。

４−１．カレイドスケープ

万華鏡のようにものを様々な角度で見る効果を、鏡をはじめとして水や光、植物、また店のガラスを利用することで街全体に取り入れ、現在の渋谷を見返す機会を作る。複雑な要素が絡み合う渋谷を視覚や体感で別の視点を通して感じ取り、そこから新しい渋谷の魅力や改善点が浮かび上がる。一人一人が自分なりの渋谷らしさを感じ、今後の渋谷との向き合いや人と人の今後の絡み合いが全体像としてのこれからの渋谷を作っていくことを期待する。

４−２．渋谷に訪れる・触れる・深める

まずは歩行者の安全を車両制限や通行方向の制限により確保する。次に、新しい視点を取り入れたデザインを通り全体に追加し、最後にセンター街にある 4 つの路地、ハチ公前広場を利用して新たな拠点を渋谷に作る。安心安全な街並みの整備によって、より多くの層の人々が渋谷に訪れ、統一的なデザインにより人びとが渋谷を回遊しながら渋谷に触れ、通りを歩いている間や拠点で別角度・視点でまちを見ることを通して渋谷への関心や渋谷への愛着を深める。

４−３．デザイン

全体として鏡を用いて今までとは違った視点や角度で風景や風景の中にいる自分や人々を見る機会を作る。鏡の使用方法は柱や凸板、ベンチなど様々な形を取り入れより多様な視点を提示する。また、拠点なる 4 つの路地はそれぞれ、鏡を大きくトンネル状に配置したタカクトンネル、鏡柱と植物で日々違った風景を見せる●、ミュージックストリートの特徴を生かし音が反響するように鏡を湾曲させた○、鏡のゲートから光を取り入れるように配置することで視線を広げる○。そして、ハチ公前広場には直径 10m の円を描くように配置した鏡柱によってセンター街と駅前の高層ビル、どちらも視界に同時に入るように配置した。またその地面には水盤を広げ視線の下にまで渋谷を広げ、そこから派生してそれぞれの通りへと水、光を流す。通りのガラスと鏡をうまく反射さ

カレイドスコープ
×
ランドスケープ

カレイドスコープを通して
渋谷に**訪れる・触れる・深める**　ことで
これからの渋谷のランドスケープを作っていく

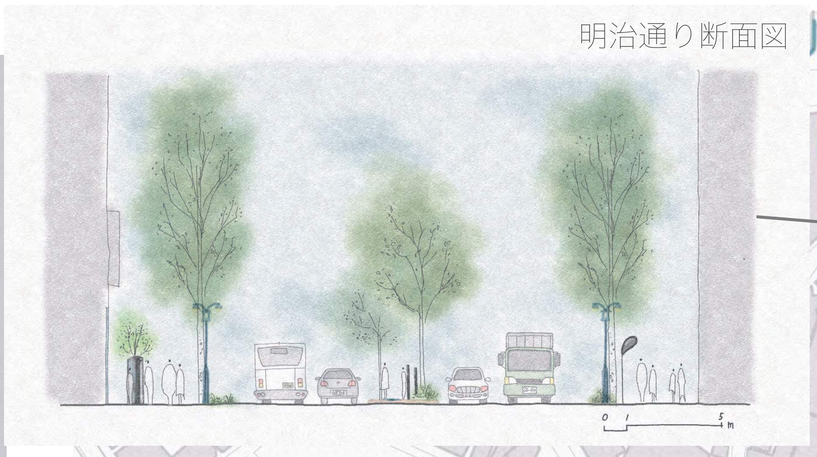
訪れる

歩行者空間の変化→
（黒く塗られているところが
歩行者空間を示す）

現況

車両制限後

触れる



明治通り断面図

ひかり

みどり

かがみ

みず

がらす

夜でも人々を誘導してくれ
視覚的に賑わいをうむ

日々成長により姿を変えるため
常に風景に変化をもたらす

角度や形態によって風景を
様々な視点で見せる

空間に流れをうみ人びとを誘導し
水盤は風景を映す

（ガラス張りの建物を利用して）
外の風景と建物内とをつなぐ

これらを融合してデザインを行う

鏡と植物を使用した
構造物（図１）

全体平面図

深める

路地１：一番渋谷駅に近い路地として、鏡のトンネルと水盤とで上下を挟み
駅前とは対象的なセンター街へと人々を誘う
路地２：最も人通りの少ない路地であり複数の鏡の柱と植物で線を描き
日々風景の変化、変わりゆく渋谷を暗示する
路地３：私道のミュージックストリートと隣接していることから
音が反響するように鏡の板を配置しそれによる音、光、風、風景など
様々な渋谷の構成要素を感じられる
路地４：他の３本とは別の通りへ隣接する路地、ガラス張りの建物や光ダクトと
歪んだ鏡のゲートがつくる光の動きに釣られて人々をまた別の渋谷へと運ぶ